管内酪農場における牛ウイルス性下痢の発生事例

茨城県県南家畜保健衛生所

〇吉川美有　齊藤隆夫

牛ウイルス性下痢（BVD）は、妊娠前期に感染することで生まれる持続感染牛（PI牛）が農場の汚染源となるウイルス性疾病である。PI牛の早期摘発・淘汰が感染拡大防止に重要であることから、茨城県では乳用牛飼養農場を対象としてバルク乳を用いた遺伝子検査及び抗体検査を毎年実施。令和6年8月の遺伝子検査にて管内酪農場で陽性が確認され、PI牛の存在が示唆された。そこで農場内全頭の血清抗原検査を実施し、PI牛2頭及びPI疑い牛（2回目の検査実施前に死亡）1頭を摘発。直ちにPI牛の淘汰及び農場全体の消毒を実施。また摘発後の産子23頭全頭について分娩後速やかに抗原検査を実施し、現在までに全頭陰性を確認。当該農場は後継牛が全て自家産で、県外預託歴がない農場だが、廃業農家から牛を導入していることが確認されたため、感染経路の推察を目的に牛の移動歴を調査。1頭目のPI牛の母牛は、他農場より導入された牛からの感染と推測。2頭目のPI牛の母牛は、導入時に既に農場内にいた1頭目のPI牛からの感染と推測。PI疑い牛については、母牛が導入元農場で感染又はPI疑い牛がPI牛から感染と推測。廃業農家は増加傾向のため、今後本事例と同様に預託などが無くてもBVDウイルスが農場に侵入する可能性は高い。よって、引き続き県内のバルク乳検査によるサーベイランスを実施すると共に、妊娠牛導入時の隔離飼育の徹底及び分娩後すぐの産子検査によるPI牛の早期摘発がまん延防止に重要。